

セイヨウカラシナ・セイヨウアブラナ 分布調査



アブラナ科アブラナ属。(Brassica juncea Czern.)

西アジア原産の一年生草本。温帯を中心に分布し、熱帯の一部にまで広がる畑地雑草であるが、野菜としても利用され、エジプト、ロシア南部、インドに多く栽培される。茎は直立し、高さ30～80 cm、無毛で白緑色。葉は下部のものは長さ30 cmに達し、しばしば羽状に分裂、縁に鋸歯がある。上部のものは全縁である。花は黄色の十字形花で、直径1 cm、上方のものはつぼみとほぼ同じ高さにある。ガク片は開花時には斜め上に向けて立つ。果実は線形で長さ3～6 cm。先には6～9 cmの嘴(クチバシ)がある。種子繁殖する。周年発生し、花期は春。日本には近年に帰化し、本州の一部堤防上など大群落をつくっている。

(「日本帰化植物写真図鑑—Plant invader 600種—」

全国農村教育協会、2001)

セイヨウカラシナ(周南市遠石) セイヨウアブラナと違って葉の基部は茎を抱かない。



アブラナ科。(Brassica napus L.)

ヨーロッパ原産の一年生草本。ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、アフリカ、オセアニアなどの温帯に分布する。油糧作物として世界に広がり、野生化している。茎は直立し、分岐があり高さ50～100 cm。葉や茎はうっすらと白粉を塗ったように白っぽく、上部の葉は無柄で基部が広く茎を抱く。花は鮮黄色、ガクは開花時にはほとんど直立して相接し、花弁は長さ10～18 mm。果実は長さ5～25 mmの嘴を持つ。周年にわたって発生し、花期は春。明治初期にヨーロッパから入り、種子から油を取るため栽培された。今は北海道、本州で河原や線路ぞい野生化して群生する。

(「日本帰化植物写真図鑑—Plant invader 600種—」

全国農村教育協会、2001)

セイヨウアブラナ(周南市東川河川敷)

一般的に「ナノハナ(菜の花)」という表現があるが、「ナノハナ」という固有名詞はなく、アブラナ科の黄色い十字形の花が咲くと、俗称として「ナノハナ」と呼ばれている。

この地域に野生化している「ナノハナ」は、「セイヨウカラシナ」・「セイヨウアブラナ」がほとんどである。『菜の花畑に・・・』という歌詞が『朧月夜』にあるが、基本的には**菜種油**を採取するために**畑で栽培**されているものであり、野草として自然に生えていると思われているのは、栽培されていたものが逸脱した帰化植物である。春の風物詩のように扱われることが多いため、河川敷などに群生している様子がメディアで紹介されることもよく見かける。また、庭や公園などに植えられていたり、空き地に生えていても誰も抜くことはなく、逆に種子を蒔いて増やされている。特に河川敷の場合は、種子が下流に流れ、河原で繁殖してしまうため、かすかに残っている生態系を破壊してしまうこともある。

今回は、普通に咲いていることに疑問を持たないであろう花が、侵入してきた外来植物であり生態系に影響を与えていることを知ってもらうため、身近に繁殖しはじめている「セイヨウカラシナ」・「セイヨウアブラナ」の分布調査をする。

- ※ 花屋で売っている「菜の花」は「チリメンハクサイ」から改良された「**ハナナ(花菜)**」という品種である。
- ※ アブラナ科の植物には、古くから菜(ナ)と呼ばれて食用にされてきたものがたくさんあり、現在も盛んに品種改良が行われている。カブ(蕪)や白菜(白菜)の仲間は黄色、キャベツの仲間は緑黄色である。カブを親として育成されたノザワナ(野沢菜)やコマツナ(小松菜)は黄色、ブロッコリーやカリフラワー(ハナキャベツ)はキャベツから改良されたものなので緑黄色の花を咲かせる。
- ※ 環境省の要注外来植物に指定されている「**ハルザキヤマガラシ**」は本州中部の高冷地や北日本に広く帰化しており、この地域では見かけない。
- ※ 菜種油については、遺伝子組み換え種子による栽培が検討されており、交雑の問題も考慮していく。